

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和3年度（2021年度）発生予報第6号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和3年度（2021年度）病害虫発生予報第6号（9月予報）

I 気象予報：令和3年（2021年）8月26日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	30	40	30
	降水量	30	30	40
	日照時間	40	30	30

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期 水稻	穂いもち	やや多	やや多	多(+)	やや多～ やや少(±)	降水多(+)	巡回調査、 防除員報告 (葉いもち)
	トビイロウンカ	やや少	少	やや少(-)	並～少(-)	気温並(±)	
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや少	やや少(-)	並～やや少 (-)	降水多(-)	フェロモン トラップ調査 合志市 並 阿蘇市 並 (±)
	カメムシ類	並	並	並(±)	並(±)	気温並(±)	予察灯調査 ミナミアオカメムシ 並 アオカメムシ 少 (-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
チャ	炭疽病	並	並	並(±)	多～並(+)	降水多(+)	
	カンザワハダニ	並	並	やや多(+)	並(±)	気温並(±) 降水多(-)	御船町 やや少(-)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	やや多	並	やや多(+)	並(±)	気温並(±) 降水多(-)	御船町 やや多(+)
	チャノホソガ	やや多	やや多	多(+)	並(±)	気温並(±) 降水多(-)	フェロモン トラップ調査 合志市 やや 少 御船町 やや 少 (-)
	クワシロ カイガラムシ	並	並	やや多(+)	並(±)	気温並(±) 降水多(-)	
カン キツ	黒点病	並	やや少	並(±)	やや多～や や少(±)	降水多(+)	宇城市 平年比 やや 少(-)
	かいよう病	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並 (±)	降水多(+)	宇城市 平年比多 (+)
	ミカンハダニ	並	並	やや多(+)	やや多～や や少(±)	気温並(±) 降水多(-)	宇城市 平年比少 (-)
	チャノキイロア ザミウマ	並	並	やや多(+)	並～少(±)	気温並(±) 降水多(-)	粘着板調査 熊本市河内町 平年並(±) 宇城市 平年並(±)



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
ナシ	黒星病	並	並	並(±)	やや少(-)	降水多(+)	
	ハダニ類	並	やや多	並(±)	並~やや少(±)	気温並(±) 降水多(-)	
	ナシヒメシクイ	やや多	やや多	—	並~やや少(-)	気温並(±)	フェロモン トラップ調査 宇城市 平年比多(+)
果樹 全般	果樹 カメムシ類	やや多	多	—	カンキツ 並~少(-) ナシ やや少~少(-) カキ 並(±)	気温並(±) 降水多(-)	予察灯・ フェロモン トラップ調査 合志市 少(-) 宇城市 やや少(-) 天草市 やや少(-) ビーティング 調査 やや多(+)
夏秋 トマト	灰色かび病	やや多	やや多	やや多(+)	多(+)	気温並(±) 降水多(+)	
	葉かび病	多	多	多(+)	並(±)	気温並(±) 降水多(+)	
	うどんこ病	多	多	多(+)	やや多(+)	気温並(±) 降水多(+)	
	すすかび病	並	やや多	並(±)	並~やや少(±)	気温並(±) 降水多(+)	



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
イチゴ	炭疽病	やや多	やや多	並(±)	並(±)	気温並(±) 降水多(+)	
	ハダニ類	やや少	やや少	少(-)	並(±)	気温並(±)	
	アブラムシ類	並	並	並(±)	並(±)	気温並(±)	
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	やや多	やや多	—	やや多(+)	気温並(±) 降水多(+)	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	—	ナス やや多~並 メロン 並 (+)	気温並(±)	黄色粘着板 トラップ調査 熊本市 並 山鹿市 多 菊池市 少 (±)
	アザミウマ類	並	並	—	ナス やや 多 メロン 並 (+)	気温並(±)	
	ハスモンヨトウ	やや少	やや少	イチゴ 並 トマト 並 (±)	ナス 並 イチゴ 並 トマト 並 (±)	気温並(±)	フェロモン トラップ調査 合志市 やや少 八代市 少 山都町 やや少 阿蘇市 一の宮 並 波野 やや少 (-)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎普通期水稻

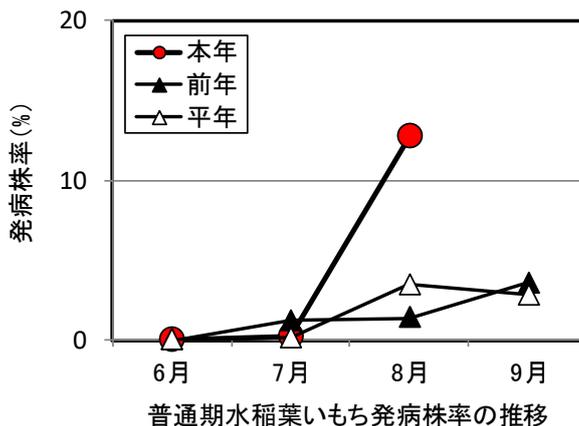
1) 穂いもち

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉いもちの発病株率12.8%（平年3.5%）で、平年比多の発生であった（+）。

イ 詳細は、令和3年（2021年）8月25日付け病害虫発生予察注意報第2号（<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210825tyui>）を参照する。

(3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は穂いもちの発生源となる恐れがあるので、薬剤防除を行う（3 防除のポイント等の「いもち病の防除対策」を参照）。



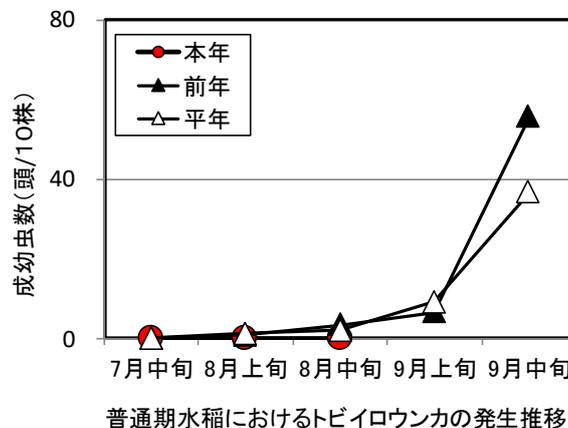
2) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生がみられず（平年2.0頭/10株）平年比やや少であった（-）。

(3) 対策 ア 9月に急激に増加する可能性もあるので、ほ場での発生状況を確認し、要防除水準（収穫30日前10株当たり30頭）に達したら直ちに防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤または液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。



◎大豆

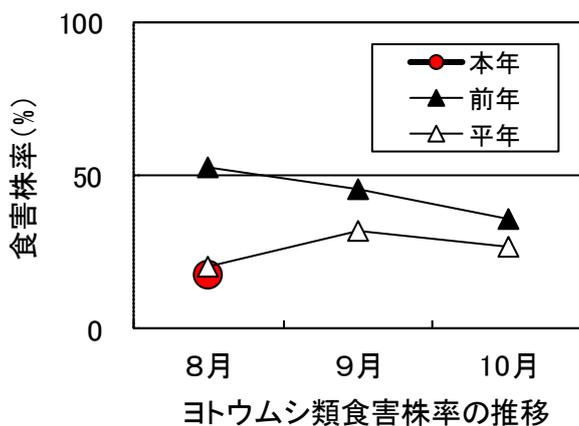
1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、ヨトウムシ類食害株率は17.7%（平年20.0%）、寄生幼虫数は0.1頭/10頭（平年1.4頭/10頭）と平年比やや少の発生であった（-）。

イ フェロモントラップによる8月第1半旬から第4半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮が1002.5頭（平年822.5頭）、合志市栄が510.7頭（平年677.1頭）で平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害により白色化した被害葉（白変葉）が認められたら防除を行う。



2) カメムシ類

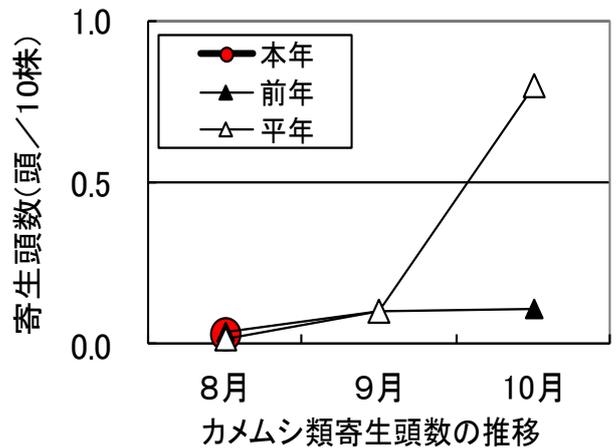
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生頭数は0.03頭/10株（平年0.01頭/10株）で平年並であった（±）。

イ 病害虫防除所（合志市）の予察灯調査での8月第1半旬から第4半旬の誘殺数は、ミナミアオカメムシが25頭（平年27頭）と平年並、アオクサカメムシが4頭（平年52頭）と平年比少であった（-）。

(3) 対策 ア 開花終期から子実肥大期にかけて、7～10日おきに2～3回の薬剤防除を行う。

イ アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシに対するピレスロイド系薬剤の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。



◎チャ

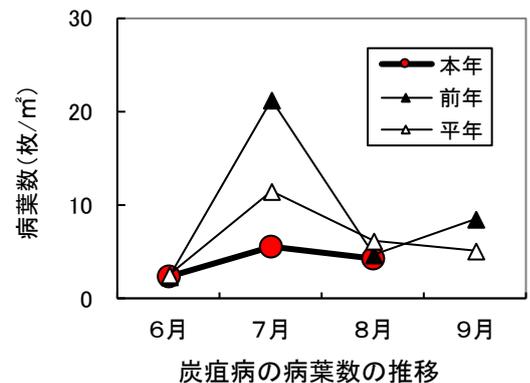
1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉が4.4枚/m²（平年6.1枚/m²）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 秋期の発生は翌春の一番茶の収量や品質に及ぼす影響が大きいため、摘採残葉の発病状況に注意し、新芽生育期（萌芽～1葉期と2～3葉期）に2回の防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



2) カンザワハダニ

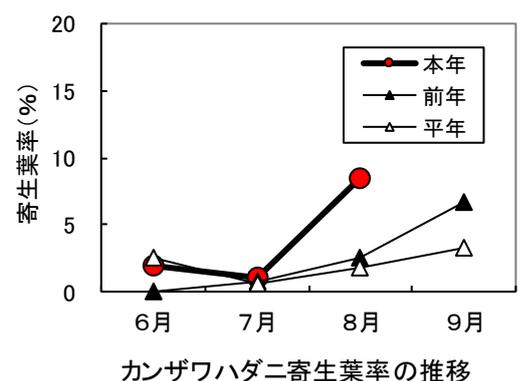
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では一部の園で多発生がみられ、寄生葉率8.5%（平年1.7%）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 茶業研究所（御船町）の8月第4半旬の調査では寄生葉率0%（平年7%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア ほ場での発生状況を確認し、密度が高い場合は、規定の散布量で葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



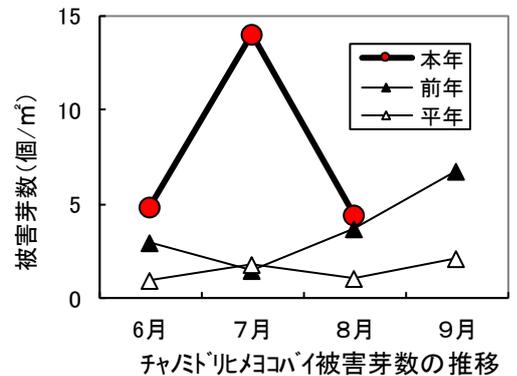
3) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害芽数は4.5個/m²（平年1.0個/m²）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、8月第1半旬～第4半旬の捕獲頭数は56頭（平年27頭）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。多発する場合は開葉初期と2～3葉期に2回防除する。



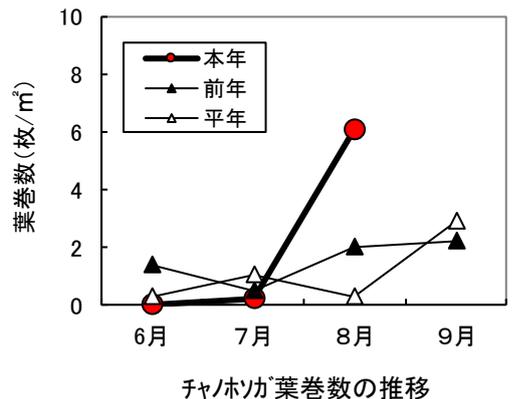
4) チャノホソガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉巻数は6.1枚/m²（平年0.3枚/m²）と平年比多の発生であった（+）。

イ フェロモントラップ調査では、合志市及び御船町は平年比やや少であった（-）。

(3) 対策 ア 新葉が加害されるので、開葉期に防除する。



5) クワシロカイガラムシ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率9.4%（平年6.2%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア ふ化最盛日は今後の気温により変動し、地域によってばらつきがあるので、下表を参考にして、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する（最新のふ化最盛日予測は病害虫防除所HPに掲載）。

イ 幼虫は農機具に付着して分散する場合もあるので、摘採、剪枝等管理作業で分散しないように十分注意する。

ウ 防除適期は、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）で、防除に当たっては規定の散布量を内部の枝まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

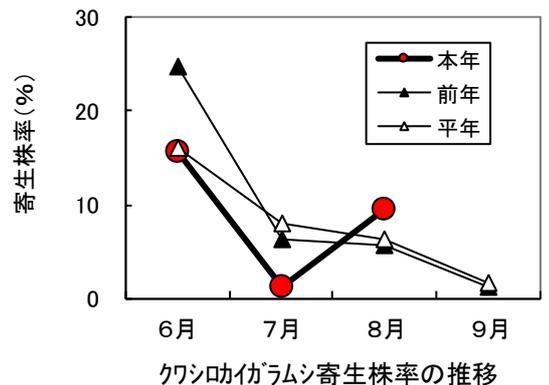


表1 クワシロカイガラムシのふ化最盛予測日（8月24日現在）

第3世代 ふ化最盛日	鹿北	菊池	甲佐	水俣	上
本年 (平年)	9月6日 (9月11日)	8月30日 (9月9日)	8月30日 (9月7日)	8月25日 (9月2日)	9月1日 (9月7日)



◎カンキツ

1) 黒点病

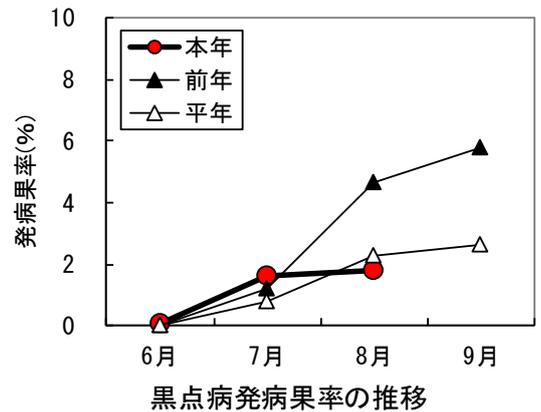
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率1.8%（平年2.3%）と平年並の発生であった（±）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第4半旬の果実発病度は28.0（平年47.1）で平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝は、伝染源になるので剪除し、園外で処分する。

イ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。



2) かいよう病

(1) 発生量：やや多

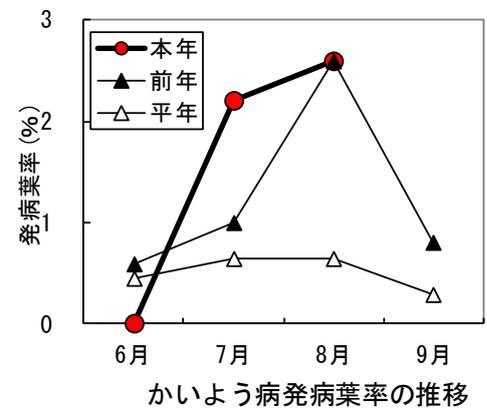
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率2.6%（平年0.6%）、発病果率4.4%（平年0.5%）で、平年比やや多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第4半旬の発病果率は62.0%（平年32.4%）で、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除および剪除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



3) ミカンハダニ

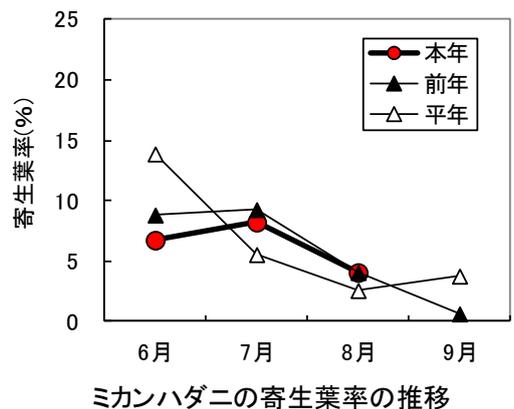
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率4.1%（平年2.5%）、寄生頭数1.5頭/10葉（平年0.6頭/10葉）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の雌成虫の寄生葉率0%（平年8.4%）、寄生頭数0頭/10葉（平年2.4頭/10葉）、平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

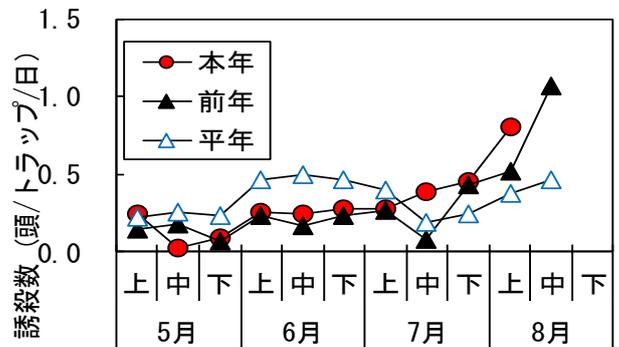
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害果率1.8%（平年0.3%）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 熊本市河内町の黄色粘着板調査では、8月上旬の誘殺数が0.8頭／日（平年0.4頭／日）と平年並であった（±）。

ウ 果樹研究所（宇城市）の粘着板調査では、8月中旬の誘殺数が0.4頭／日（平年1.2頭／日）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 平年に比べて羽化最盛期が5～11日早い予測となっているため、下表を参考に早めの防除に努める。

イ 発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を越えた場合は防除を行う。



黄色粘着板によるチャノキイロアザミウマ誘殺数の推移 (熊本市河内町)

表2 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (8月24日現在)

地点名	本年		平年	
	第7世代	第8世代	第7世代	第8世代
熊本	8月29日	9月16日	9月6日	9月27日
三角	9月5日	9月25日	9月12日	10月6日
本渡	9月11日	10月5日	9月20日	10月16日
八代	9月4日	9月24日	9月9日	10月3日
水俣	9月5日	9月27日	9月12日	10月7日

◎ナシ

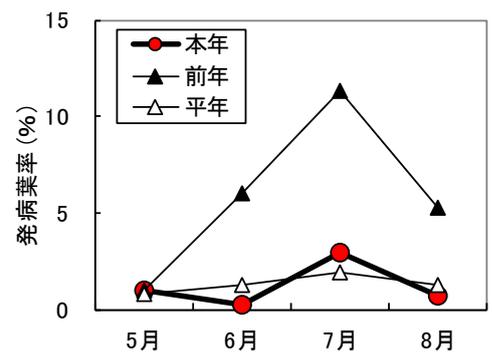
1) 黒星病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率0.7%（平年1.3%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 秋期の降雨によって感染したりん片や葉が翌春の伝染源となるため、収穫後から早めに防除を開始し、落葉期（9月中旬～11月中旬）までに3～4回の薬剤防除を行う。

イ 園内の落葉は、越冬伝染源となるため、園外へ持ち出して処分する。



黒星病発病葉率の推移



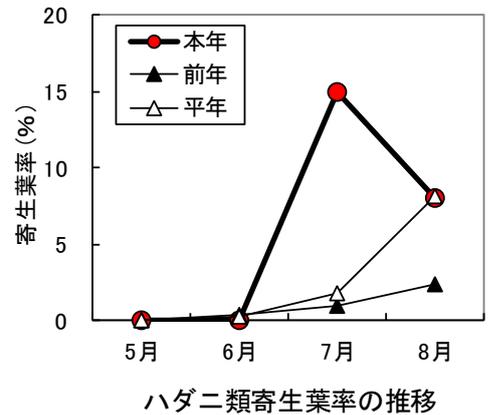
2) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率 8.0% (平年8.2%) と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30%以上、または雌成虫の寄生頭数が1葉当たり1~2頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



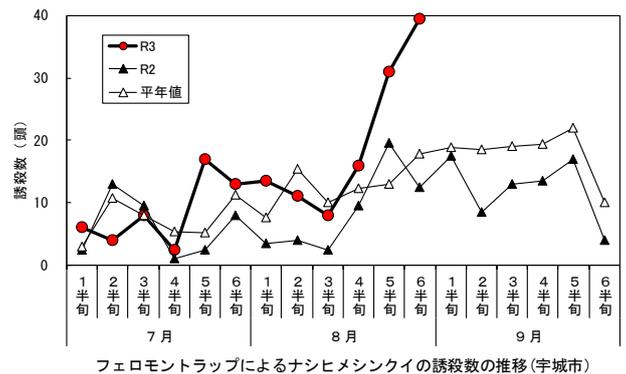
3) ナシヒメシンクイ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 果樹研究所(宇城市)のフェロモントラップ調査では、8月6半旬の誘殺数が40頭(平年17.8頭)と平年比多の発生であった(+)

(3) 対策 ア 世代を経るごとに密度が上昇し、収穫の遅い品種ほど果実被害が多くなるため、成虫発生盛期の7~10日後を目安に、収穫前日数に注意して、薬剤防除を実施する。

イ 被害果や使用した袋などは放置せず、園外に持ち出して処分する。



◎果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月下旬におけるヒノキ球果に寄生する成幼虫数は8.0頭／5枝（平年3.5頭／5枝）と平年比やや多であった（+）。

イ 予察灯及びフェロモントラップの8月第1～4半旬の誘殺数は、下表のとおり合志市で平年比少、宇城市と天草市で平年比やや少であった（-）。

(3) 対策 ア 飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園内をよく見回り、早期発見および発生初期の防除を行う。

イ カメムシ類は夕暮れ時に園外から侵入し、翌朝飛び去るため、夕方や早朝の防除が有効である。

ウ 収穫期間近に薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

エ チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを病虫害防除所のホームページに掲載しているため、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や防除適期の参考にする

(<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>)。

表3 各地域のカメムシ類の誘殺状況（8月第1半旬～8月第4半旬）

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)
合志市	39	267	14.6	2	250	0.8	28	154	18.2	0	2	0.0
宇城市 (松橋町)	918	1,174	78.2	2	1,975	0.1	142	458	31.0	0	10	0.0
天草市 (本渡町)	1,512	2,208	68.5	1	2,231	0.0	210	287	73.2	0	23	0.0

単位：頭、平年比(%)：(本年誘殺数／平年値)×100



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

◎夏秋トマト

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部のは場で多発生が確認され、茎葉の発病株率19.0%（平年19.5%）、果実の発病株率3.7%（平年0.1%）で、平年比やや多の発生であった（+）。

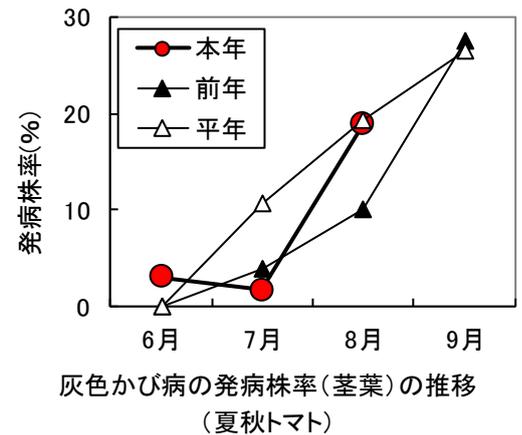
(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 他の病害も併発しやすくなっているので注意する（詳細は令和3年8月23日付け発生予察技術情報第7号を参照する

http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210823gi_jyutsu.pdf) 。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移
(夏秋トマト)

2) 葉かび病

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部のは場で多発生が確認され、発病株率30.0%（平年7.4%）で、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。

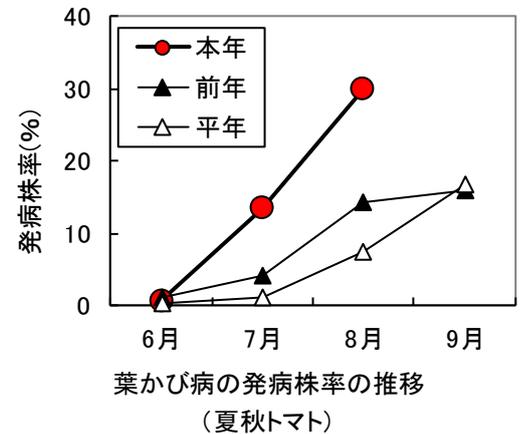
ウ 肥料切れや着果負担による草勢低下は、本病の発病を助長するので適切な肥培管理に努める。

エ 9月の秋雨の時期は曇雨天が続くことが予想されるため、気象予報に留意し、晴れ間を見計って計画的に防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

カ 他の病害も併発しやすくなっているので注意する（詳細は令和3年8月23日付け発生予察技術情報第7号を参照する

http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210823gi_jyutsu.pdf) 。



葉かび病の発病株率の推移
(夏秋トマト)



3) うどんこ病

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が確認され、発病株率19.7%（平年0.5%）で、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 乾燥条件でもよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないように管理する。

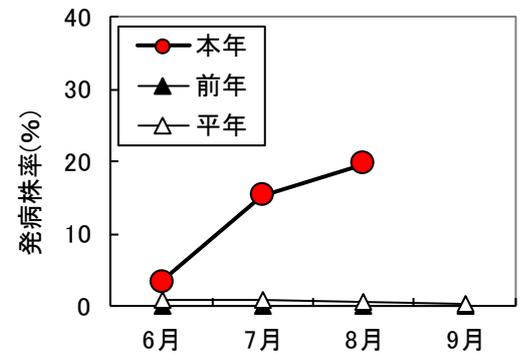
イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ 他の病害も併発しやすくなっているので注意する（詳細は令和3年8月23日付け発生予察技術情報第7号を参照する

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210823gijyutsu.pdf>) 。



うどんこ病の発病株率の推移
(夏秋トマト)

4) すずかび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が確認されたものの、発病株率39.7%（平年47.3%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

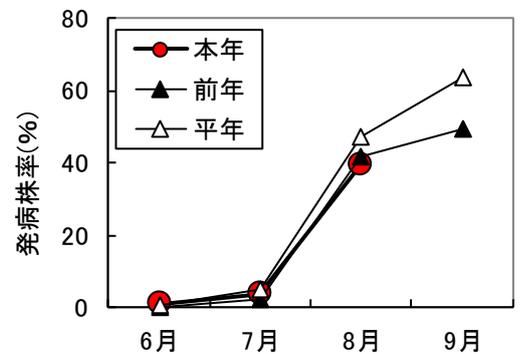
イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。

ウ 9月の秋雨の時期は曇雨天が続くことが予想されるため、気象予報に留意し、晴れ間を見計って計画的に防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ 他の病害も併発しやすくなっているので注意する（詳細は令和3年8月23日付け発生予察技術情報第7号を参照する

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210823gijyutsu.pdf>) 。



すずかび病の発病株率の推移
(夏秋トマト)



◎イチゴ

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 発病株は早期には場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する（3 防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策」を参照）。

イ 頭上かん水を避け株元に手かん水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 定植苗の選抜を徹底し、本ぼや育苗ほにり病株を持ち込まないようにする。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

2) ハダニ類

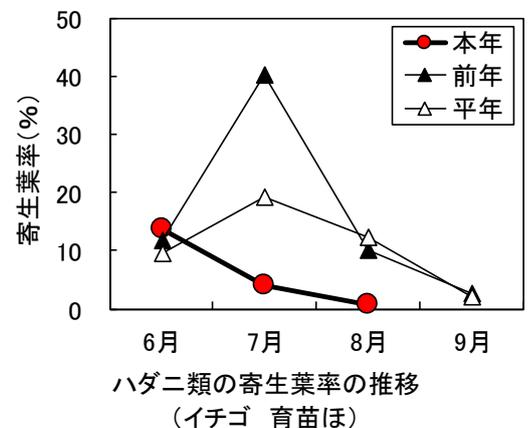
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では寄生葉率0.7%（平年12.3%）で平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策」を参照）。

イ 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) アブラムシ類

(1) 発生量：並

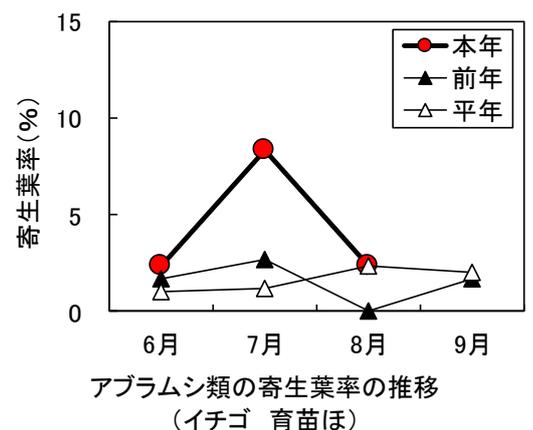
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では寄生葉率2.3%（平年2.4%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する。

イ 育苗床や本ぼ周辺の雑草は定期的に除草する。

ウ 若い葉の裏や未展開葉に寄生していることが多いため薬剤防除の際は薬液が寄生部位に十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋キュウリ（高冷地）

1) ベと病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の防除員報告では、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。

イ 発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 他の病害も併発しやすくなっているので注意する（詳細は令和3年8月23日付け発生予察技術情報第7号を参照する

(http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210823gi_jyutsu.pdf) 。

◎夏秋果菜類（平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月上～中旬に野外に設置した黄色粘着板（10×10cm）の誘殺数は、熊本市で2.6頭/日/枚（平年2.8頭/日/枚）で平年比並、山鹿市で3.9頭/日/枚（平年2.5頭/日/枚）で平年比多、菊池が0.1頭/日/枚（平年1.1頭/日/枚）で平年比少であった（±）。

イ 8月の防除員報告ではナスで平年比やや多～並、メロンで平年並の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 密度が高くなると各発育ステージが混在し防除が困難となるため、低密度での防除を徹底する。

イ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の防除員報告では、ナスで平年比やや多、メロンで平年並の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類及びトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策「入れない」対策をしましょう」を参照）。

ウ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査において、夏秋トマトでは寄生株は確認されず（寄生株率平年0.0%）、イチゴでは寄生株率0.7%（平年0.2%）で、平年並の発生であった（±）。
イ フェロモントラップによる8月第1半旬～第5半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮で平年並、合志市・山都町・阿蘇市波野で平年比やや少、八代市で平年比少であった（－）。
- (3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。
イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。
ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

各地域のハスモンヨトウの誘殺状況（8月第1半旬～第5半旬）

市町村名（地域名）	本年	平年値	平年比（%）
合志市（栄）	516.3	905.5	57.0
八代市（鏡）	615.1	1,283.8	47.9
阿蘇市（一の宮）	1,130.5	1,093.6	103.4
山都町（鶴ヶ田）	69.9	114.1	61.3
阿蘇市（波野）	109.6	188.8	58.0

単位：頭、 平年比（%）：(本年誘殺数/平年値)×100

3 防除のポイント等

いもち病の防除対策

- 8月中旬からの日照不足により稲体はいもち病に罹病しやすい状態となっています。
- 巡回調査によると、早植え水稻及び普通期水稻での葉いもちの発病株率は平年比多の発生でした。
- 福岡管区气象台が8月19日に発表した九州北部地方1か月予報によると8月21日以降の降水量は平年に比べ多い予想であり、いもち病の発生に好適な条件となります。
- いもち病の発生が多いほ場では防除対策を徹底しましょう。
 - (1) 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、予防防除を徹底する。
 - (2) ほ場をよく観察し、葉いもちが上位葉に発生している場合は速やかに防除を行う。
 - (3) これから出穂する水稻では、穂ばらみ期～穂揃い期に粉剤や水和剤を散布する。
なお、粒剤は出穂前に散布するが、薬剤の種類によって使用時期が異なるので確認して使用する。



水稻病害虫防除にあたっての農薬危害防止の徹底について

斑点米カメムシ類やトビイロウンカ等を対象とした防除にあたっては、農薬使用による周辺住民やミツバチ等への危害が発生しないよう、以下の事項を遵守し、危害防止対策を徹底しましょう。

- (1) 農薬を使用する場合は、関係法令等を遵守するとともに、事前に農薬を散布する日時、使用する農薬の種類等について、周辺住民等へ周知を行うこと。
- (2) 周辺の養蜂家と巣箱の位置や防除計画について、事前に情報を交換すること。また、防除を行う際には、「蜜蜂飼育関係集計表」等を基に、巣箱の位置を確認し、ミツバチや巣箱に農薬がかからないよう、ほ場周辺を十分に確認すること。
- (3) 農薬散布の際は、散布区域内及びその周辺における危害防止に万全を期すとともに、作業関係者の安全について十分留意すること。

8月中旬の天候不順に伴う病害の発生に注意しましょう

今年の8月中旬は、曇雨天が長く続いたことから、平年に比べて気温が低く、降水量が多く、日照時間が少なくなりました。そのため、現在、野菜・花き類において、灰色かび病などの糸状菌（かび）病や軟腐病などの細菌病の発生が増加傾向にあります。

九州北部地方1か月予報によると、向こう1か月の降水量は平年に比べて多く、日照時間は平年に比べて少ない予想であり、今後も野菜・花き類の病害がまん延しやすい状況が続くことが見込まれます。下表を参考に、ほ場内での病害の発生に注意し、予防防除に努めましょう。また、発生が確認された場合には、発生初期のうちに速やかに防除を行いましょう。

表 各作物における注意を要する主な病害名

作物名	作物名	病害名
果菜類	イチゴ（育苗）	炭疽病、疫病
	キュウリ	べと病、褐斑病、軟腐病
	トマト	灰色かび病、すすかび病、葉かび病、疫病、軟腐病
	ナス	灰色かび病、すすかび病、黒枯病、褐色腐敗病
	ピーマン	灰色かび病、炭疽病、斑点病、疫病
葉茎菜類	アスパラガス	茎枯病、褐斑病
	キャベツ	軟腐病、黒腐病
根菜類	カンショ	基腐病
	サトイモ	軟腐病、疫病
	ショウガ	根茎腐敗病
	ダイコン	軟腐病、黒腐病
	レンコン	褐斑病
花き類	カスミソウ	灰色かび病
	トルコギキョウ	斑点病
	露地キク	黒斑病
その他	その他	灰色かび病、軟腐病



野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう

本県では「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「スイカ退緑えそ病」、「トマト黄化えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらのウイルス病対策は、ウイルス感染植物を除去することと保毒虫を防除することが基本となります。しかし、薬剤処理による媒介微小害虫の防除だけではウイルス病を完全に抑えることは困難であるため、耕種的防除や物理的防除を組み合わせ合わせた総合的な防除対策を講じる必要があります。

特に、これからの時期はトマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、施設内への飛び込みが更に多くなるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期となります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早いほど経済的被害が大きくなるため、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

1 育苗期

- (1) 育苗ハウスは、本ぽと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- (2) 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- (3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (4) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (5) 定植2～3日前に、育苗期後半に登録のある薬剤を処理する。

2 本ぽ定植以降

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm(アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下)防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ぽへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- (4) 育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策

イチゴはこれから定植が始まります。重要病害虫であるうどんこ病、炭疽病、ハダニ類は定植前の防除を徹底して、本ぼりに病株、寄生株を持ち込まないことが重要です。以下の防除対策を徹底して、定植後の発生を抑制しましょう。

1 うどんこ病

- (1) 発生しやすい葉裏を注意して観察し、初期発生を見逃さないように努める。
- (2) 発病葉や不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (3) 定植前に薬剤防除を徹底する。薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2 炭疽病

- (1) 定植までは育苗ほの雨よけを必ず行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 育苗床が冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- (4) 定植まで定期的に薬剤による予防防除を行う。特に、降雨後、摘葉後、ランナー一切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- (6) 苗の不足が予想される場合は、早めに関係機関に連絡し、調整を行う。

3 ハダニ類

- (1) ほ場内および周辺の雑草は定期的に除草する。
- (2) ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- (3) 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- (4) 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤などの物理的な防除効果を持つ薬剤を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が無いため、5～7日の間隔で複数回散布する。なお、気門封鎖剤は、高温時など薬害が生じやすい条件での使用は避ける。
- (6) 殺ダニ剤は、同一系統薬剤の連用を避け、育苗から本ぼまでの栽培期間を通し計画的に使用する。
- (7) 本ぼで天敵（チリカブリダニやミヤコカブリダニなど）を利用する場合は、薬剤の使用にあたって、使用する薬剤の天敵への影響日数に注意する。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
普通期 水稻	紋枯病	並	巡回調査は平年並(±)。 出穂期以降高温が続くと上位葉鞘に病斑が進展するため、発生が多い場合は防除を行う。
	斑点米 カメムシ類	並	トラップ調査(合志市)：平年比やや少(-)。 常発地帯では2回目の防除を穂揃い期の7～10日後に行う。
大豆	べと病	並	巡回調査は、平年比少(-)。 防除員報告は、平年並(±)。 湿度が高いと発生が助長されるため、降雨後の発生に注意し、発病が拡大しないうちに防除を行う。
チャ	チャノキイロ アザミウマ	並	巡回調査は、平年並(±)。 トラップ調査 合志市：平年並(±) たたき落とし調査 御船町：平年並(±) 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。
	チャノコカク モンハマキ	並	巡回調査は、平年比やや多(+) トラップ調査 合志市：平年並(±) 御船町：平年比やや少(-) 発蛾最盛期の7日～10日後に防除する。
カキ	炭疽病	やや多	防除員報告は平年比やや多(+) 降水量は平年比多(+) 発病枝は園外で処分し、病原菌の密度を下げる。 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。
イチゴ	うどんこ病	並	巡回調査では平年並(±)。 防除については、3 防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病およびハダニ類の防除対策」を参照する。
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	やや少	巡回調査ではトマトで平年比少(-)。 現在発生しているほ場では、早期に防除する。
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	防除員報告では平年並(±)。 葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。



作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
夏秋 キュウリ (高冷地)	うどんこ病	並	防除員報告は平年並(±)。 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
夏秋 キャベツ	軟腐病	やや多	防除員報告では平年比多～やや多(+) ほ場の排水をよくし、現在発生しているほ場では、早期に防除する。
露地キク	白さび病	並	防除員報告は、平年並(±)。 罹病葉が伝染源となって感染が拡大するので、罹病葉は早めに除去し、適切に処分する。
【野菜病虫害の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」